
神のいない墓地で僕は

湮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神のいない墓地で僕は

【Nコード】

N0944W

【作者名】

湮

【あらすじ】

ただ愛していればよかった。それだけでよかった。君がいれば国なんていらなかった。だから僕はラギ・イリスに復讐する。

帝国特殊部隊『王の銃』にして『特殊能力保持者』通称『病人』の一人であるラギ・イリスに降りかかるただ純粹たる憎悪。

狂信者と復讐者のおはなし。

プロローグ

窓から眩しいほどに月の光が差し込んでいる。視線だけ動かし窓から月を見ると満月だった。ここまで月明かりが綺麗なのは久しぶりだ。冬も近くなっているから空気が綺麗なのだろう。うふふ人の心も綺麗になればいいのになー。

そんなやkutたいもないことを考えながら現実逃避をする。

だが現実逃避は終わらせなければならぬ。

なぜならば、いい加減両手を上げているのは疲れたからである。

「ってわけで両手おろしてもいい？ダメって言われたら僕ちよつと悲しいな」

「何がというわけなんだ。ダメに決まってるだろ。ありえないだろ」

目の前で眉間に銃口を向けている神経質そうな男は無表情かつ無下に却下する。

当然だろう、このような状況で腕をおろしていいのは死ぬ時かこれから死に場所へ行くときだけなのだろうから。

このような状況、つまるところワンルームのアパートほどの窓一つしかない狭い部屋で男二人が向合っている。ただし一人、神経質そうな男は銃を突きつけて。もう一人、二〇代前半くらいの男は撃たないでほしいという意味を込めて両腕をあげている。

銃という簡単に人を殺せる道具が進化し続け安く手に入るようになった結果、ありふれた状況になったのだろうか。

少しだけため息をつく。

ため息が聞こえたのか銃を持った男がいぶしげな顔をする。

「だいたいあなたなんなんだ？何で急に私が使っている倉庫に入ってきたんだ？その恰好を見ると警察ってわけではなさそうだが……」

男は右腕だけで銃を突きつけたままジロジロと恰好を見る。確かに警察の恰好ではなかった。

ジーンズに膝まであるブーツ。それに黒のシャツ。シンプルでその辺どこにでもいそうな若者に見える、何者でもない恰好だろう。それは否定できない。そもそもそういう恰好を選んだのだから。

「警察でもないのに勝手に人の倉庫を踏み込む、ってことは泥棒か？」

銃を持った男は自分の言葉を信じていない口調で尋ねる。

当然だろう、窓があるこの倉庫は外から簡単に覗ける。

つまり、何もないとわかっている上に所有者 所有者でないにしろ中に人がいる がいる時点でシャツターを力づくであけて中に入ってきたりはしないだろう。

「泥棒ではないです。もちろん警察でも」

ここは正直に答える。

その答えを聞いても銃を持った男はさらに不信感を増したような顔をする。

「だったらあれか、最近この辺によく出没する殺人鬼？拷問好きの……サディスト……噂によるとあの『病人』どもの仕業らしいじゃないか……あなたがそうなのか？」

銃を持った男はなんとはなし高圧的な顔になるが、すぐに無表情に戻る。

少しだけ苛立つ。

「僕は殺人鬼なんてたいそうなものじゃないですよ。それに『病人』でもない」

「じゃあなんなんだ！なんなんだよあんたは！」

否定すると銃を持った男は急に大声をだしてきた。

神経質そうだったのは見かけ倒しじゃないらしい。だがたぶん演技なのだろう。

「何が目的なんだよ！吐けよ！こっちは銃があるんだぞ！あんたが『病人』でも殺人鬼でもどうしようもないだろ！本当のことを言え！言わなきゃ殺すぞ！」

（言っても殺すだろうに）

口にはださず心の中でつぶやく。

何も言わなかったことで苛立ったのか、男が銃をおでこに強く、銃口の跡が残ろう程強くグリグリと押し当てる。

「さあ言え！」

（限界かな）

少しだけ目を瞑り、今度は言葉をハッキリと口にだす。

「僕はあなたを捕まえに来ました」

その言葉と同時に男の背後に『転移』する。

背後からで見えないが男は明らかに動揺したらしく体が硬直する。当然だろう、目の前

から急に人が消えれば動揺しないはずがない。

その隙を見逃さず銃を構えていた腕とは逆の左腕をひねりあげ関

節を極め、そのまま地面に組み伏せる。

男は簡単に地面と倒されたが、もがくように右腕をひねり銃 急に倒されても離さなかつたらしい を耳の横に持っていき撃とうとしたが、

「無駄」

その声と同時にビー玉くらいの大きさの光球が男の頭上に出現し、銃の上半分をまるで初めからなかつたかの如く綺麗に音もなく消し飛ばす。文字通り消す。消滅。

「な……!?!」

男が愕然とするのが体越しに伝わる。

「あなた……あなたなんなんだよ……」

さきほどと同じような言葉だが、さきほどとは違い諦めが混ざっている口調だった。

「だから言っただろ。噂を信じてあなたを捕まえに来たんですよ。サディストの殺人鬼」

再び男が動揺しているのが体から伝わる。

「わ、私は違う! 『病人』ではない!」

『病人』という言葉に苛立つ。

「そうだな、あなたは『病人』ではないかもしれない。だが比喩や

嫌味ではなく本当の意味であんたは病人だと思うよ。十才以下の男子を暴行、最低でも三日間に渡る拷問を加えたんだ。これが病人じゃなかったらなんだ？異常者か？」

苛立ったせいか言葉が少し乱暴になる。

しょうがないだろう。男の言う『病人』なのだから。

「証拠！証拠がないだろ！されにあんたは警察じゃないのだろ！？」

男は諦めきれないらしくわめき、もがくように体を動かす。

だが完全に組み伏せられているせいかまったく動かない。どころか逆にどんどん関節が極められていく。男は苦悶の表情とともに小さくうなる。

うめき声が聞こえたので口を開く。

「証拠か、証拠はいま僕の仲間が回収してるよ。あんたの家にね。

だからあんたをここに留めていたんだよ。まあ監視してたら倉庫をでて家に帰りそう、もしくは新しい獲物を探しにいきそうだったんでちよつと焦ったけどね」

「ふざける……な！警察でもないくせに！」

いま組み伏せられている者の言うことを信じるのもどうかと思うが、そのことは無視し、

「ああ、警察ではないさ。だが権利はある。言っただろう？噂を聞いてきた」

男は言葉の意味がわからないらしく、わめく。

「警察ではないんだったら私から離れろ！訴えてや、ぐあっ！」

うるさかったので折れる寸前まできつく極める。これ以上うるさくするなら折つてもいいかもしれない。

そんなことを考えながら少しだけ深く呼吸をし、いっきにまくしたてる。

「殺人犯が訴えるなよ……物的証拠はあなたの家にある凶器だけじゃないんだよ？警察だって無能じゃない。昨日の殺人の時点であんたを犯人だと特定した。あなたの持ち物も現場から発見した。市場に出回っていない指輪らしいじゃないか？そこから犯人はあなただと断定した。だがあんたが『病人』……『特殊指定人種』である可能性が生じたから僕がでてきた」

「なっ……」

男の顔が一気に強張る。

「その顔からさっするにあんたが噂を振りまいたんだな？連続殺人鬼は『特殊指定人種』だつて。うまいこと考えるよ。だがそれも意味がなかったな。どっちだろうと捕まる。いや、裁判を受けて死刑になるか、今この場で死ぬか、だな」

「くそ！くそ！くそ……」

男の体から急激に力が抜けていくのが伝わってくる。諦めたのだろう。グッタリとしている。あまつさえ嗚咽さえ聞こえてくる。

捕まったことへの悔いか、不甲斐ない自分にたいする憐れみか、もしくは死への恐怖か。

一六人もの子供を殺害した異常な殺人鬼とは思えない姿。

（本当にこいつは病人じゃないか）

胸中で毒づく。異常者。こんな奴に『病人』扱いされたのが酷く腹立つ。

「さあ、立て。もうすぐお前を捕まるための人間が来る。せめて出迎えてやれ」

腕を掴んだまま無理やり引き起こす。

少し、いやかなりつらそうな顔をしたが無視する。

この国の法律では殺人鬼などに人権はない。

引き起こされた男はウツロな表情でブツブツと呟く。

こんなはずじゃなかったこんなはずじゃなかったありえないありえない。私が捕まるわけがないありえない。耳触りな羽虫のようにつぶやき続ける。

(ぶん殴って気絶させたほうがいいか?)

あまりにも耳触りなのでそんな考えが浮かぶ。特に却下させることもないので実行しようとする。男が恨みがましい目をして口を開く。

「あんた！あんたのせいだ！あんたはなんなんだよ！」

男の言葉に少しだけ蔑んだ表情を浮かべ口元だけ薄く笑い、

「僕はお前のような異常者を取り締まる人間だよ。帝国第一騎士団所属特殊治安維持部隊。そしてあんたのいう『病人』、『特殊指定人種』のラギ・イーリスだ。この名前を死刑になるまで恨んでろ。お前が死刑になるきっかけを作った男だ。短い時間を憎んで悔め。なぜすぐに引き金をひかなかったかをな」

勝ち誇るように告げて、男の拘束を解き、そのまま男のコメカミを殴りつける。

一瞬の動作で何も反応ができなかった男はそのまま眠るように気絶する。

ラギは本当に気絶してるか確認すると倉庫内にあったロープ 被害者を縛ったものだろう を使い男を完全に拘束する。

このまま殺してもよかった。

ロープをほどいてから改めて首に巻き、倉庫内につるしてもよかった。

『光』を使い被害者と同じように体のありとあらゆる部分を死なないように削りながら拷問してもよかった。

単純に撲殺してもよかった。

だが想像だけに留めておく。

大昔の異教徒弾圧のように一般市民から私刑を受けるのが相応しいと思っただからだ。

でも半殺しくらいにはしておこう。銃を突きつけられたし。

そう心に誓うとさきほど気絶させたのを後悔した。起きていなければ苦痛に歪む顔を見られない。

しょうがないので起きるのを待つ。

警官隊到着とこいつが起きるのどっちが早いかわ、そんなことを考えながらズボンのポケットから煙草マツチを取り出し火をつける。

紫煙をくゆらせながら待つ。

『ラギ・イーリス』

所属：帝国第一騎士団所属特殊治安維持歩兵部隊。通称『帝国の銃』。主に『人類が人類以外及び生物外の特異な能力を持つ人間』や『各都市の警察機関では対抗できないテロリスト及び犯罪者』を取り締まる。国家間の戦争状態になった場合ただちに『特殊部隊』に編入される。能力、実績、愛国精神すべてを掛け合わせた者しか

入隊できない部隊。

そして『特殊指定人種』通称『特殊能力保持者』俗称『異邦人』
『病人』

国家登録能力『触れた物体を消滅させる光』『近距離及び中距離
への生物または物体の転移』

過去の功績、メイナ帝国とミルサイナ神聖王国との領土紛争にお
いて勲章受領二回。その功績が認められて『帝国の銃』へと転属す
る。

その後数度の極秘任務（詳細は後述）と『神話計画』事件におい
て当時の隊長および隊員四名の戦死、副隊長が重度の怪我を負い入
院したことによる同部隊の隊長へ昇格。

だが実際は隊員数三名（うち一名は事務官）なので有名無実化で
ある』

とそこまで読んで男は書類から目を離す。

同僚に頭を下げて調べてもらった結果がこの数枚の書類だった。
後ろのページを流して読むと個人情報も多々書いてある。

（頼んだかいがあった）

男は胸中でつぶやくと書類を机の上に置き、目を閉じる。

（もうすぐ、もうすぐあの男とあの国に復讐するよアリア。僕のア
リア。君の子供たちと一緒に）

頬に違和感を感じ、目を開けて手で頬をなでる。

気づかないうちに涙を流していたらしい。

涙などもうでないと思っていた。

だがこの気持ち冷めないうちはまだ彼女のために泣けるらしい。

男は再び書類を目を通し始めた。ラギ・イーリスを殺すために。

コツコツコツ……。。

靴の音が廊下中に反響する。ラギはこの廊下があまり好きではなかった。なんだか幼年学校時代を思い出してしまう。嫌な思い出の方が多い。

教師という名の元軍人のサディストどもはとにかく一日一回は理由をつけて全員を殴った。そのせいで教室で騒いでる時に聞こえてくる足音にビクビクしたものだ。だが教室で騒ぐのはやめれなかった。隠れてする悪いことほど面白いことはなかった。

思い出し一人苦笑いする。嫌な思い出と同時に少しはいい思い出もでてくる。不思議なものだ。

そんなことを考えていたら目的地である木製の扉の前につく。扉のプレートには『関係者以外の立ち入りを禁じる』とだけ書いてあって何の部屋は書いていなかった。

ラギは構わずノックもせず扉を開ける。

扉の先には安物という感じのする木製の机と椅子が二脚。座り心地の悪そうなスチール製の長椅子が二脚。その目の前にはホワイトボードが立っている。まわりには書類などを保管するこれまた安物感が漂う木製の棚と観葉植物。その横には上にコーヒーマイルと簡易コンロ、上にはヤカンが置いてあるだけの窓一つない部屋だった。中に誰もいないのを確認すると内部で繋がっている左側の部屋を覗く、合皮らしいソファとセットであるう低いガラスのテーブルが真ん中に置いてあり、壁には柱時計と中くらいの窓が一つだけついてあるだけの簡易応接間だった。こちらにも誰もいない。

今度こそ、とばかりこちら内部で繋がっている。ただし扉はついている。右側の部屋を覗いてみる。扉を開けるとそこには頑丈そうな密閉度の高いロッカーが八つほど置いてある。

そのうちの一つを開けて女性が何やら中をメモを取りながら調べ

ている。

女性は扉の音で気が付いたのかこちらを向き、

「戻っていたのですね。お疲れ様です」

「うん、それ備品のチェック？終わったらでいいからコーヒーいれてくれないかな」

「チェックが終わって整理してただけなのですぐ入れます」

「そう？じゃあ頼むよティル」

そう言うが早く女性 ティルは立ち上がり隣の部屋へ行きコーヒをひきはじめた。

ラギはコーヒのいい匂いを少し嗅いでから左奥の部屋へ引き換えしソファー 本来は来客用だが気にしないでおくことにする へ腰を沈める。スプリングがあまりきいていないが隣の安い木製椅子よりはマシだろう。あの椅子ではリラックスなどできやしない。

リラックスついでにポケットから煙草とマッチを取り出し火をつける。深く紫煙を体全体に染み込ませるように吸い込み一気に吐き出す。至福の瞬間。手探りで机の上の灰皿を取り寄せる。

1本目が吸い終わったところにティルがコーヒを持ってきた。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

ティルはコーヒを渡すとラギの前にあるソファーに座る。どうやら自分の分も入れたようだ。

座った彼女を見る。

ティルというのは愛称で本当はティティス・ルベンクスという。

二十前後なのに職業がらか化粧は薄く、フワつとしたボブヘアの下にキリツとした眼差し。若草色の軍服を少し着崩している。中に来ているワイシャツも第一ボタンを外しネクタイもゆるめてある。

いつだったか「首を絞められているようで好きじゃない」というのを聞いたことがある。もっともこの部屋にいる時 来客がある時もあるが 以外はちゃんと着ているので気にしないことにしている。そもそもシャツとジーンズの自分が言うことでもないだろう。

美人の部類にははいるだろう。たびたびナンパをされるらしい。そのたびにまんざらでもない顔をして自慢してくる。

ラギはそんな彼女が少し好きだった。

「何？どうかしました？」

視線に気づいたのかいぶしげな顔をしてくる。

「君を見てたのさー」

「うざいですね。閲覧料とりますよ」

彼女は薄く笑いコーヒーを飲む。ラギもコーヒーに口をつけ、また煙草に火をつける。

紫煙を吐き出すとテイルが目を細め、

「ラギ、煙草を吸う時は窓を開けてください！何度も言ってるでしょ？嫌煙権ってご存知？」

「あーへいへい」

不承不承立ち上がり窓を開ける。少し肌寒い外気が心地よいので窓際で吸うことにする。少しだけ反抗的になった気持ちも含んで。ラギは傷つきやすいのだ。

「そうそう、ラギ」

「ん？」

「戻ったら部屋に来るように、とルースト様から伝言を預かってま

す

ルースト、直属の上司の顔を思い浮かべる。

「なんだろうな？増員の件だったらいいんだけど」

「そうですね。さすがに今の人数で続けていくのは不可能ですからね」

隊の増員。これは当面の問題だった。

一か月前に起きた『任務』のせいで隊員の人数が三人にまで減ってしまった。うち一人は事務官であるティルなので実質的には二人さらにもう一人のだが”能力”が護衛向きなので任務の殆どを貴族や重要人物などの護衛に回している。

しかし一口に増員といっても簡単ではない。名目上、能力、実績、愛国精神すべてを掛け合わせた者しか入隊できないことになっているので中々兼ね備えた人物などいない。さらに『特殊指定人種』通称『特殊能力保持者』と戦闘状態になることが多々あるので『特殊能力保持者』もしくは『特殊能力保持者』と戦闘経験があるものからしか選ばれない。

この『特殊指定人種』通称『特殊能力保持者』というものが曲者だ。

ラギが忠誠を誓う国、メイナ帝国とその周辺わずかな土地でしか『特殊指定人種』が生まれてこない。生まれてくる原因もわかっておらず、口さがない無責任なインチキ学者や医者人間からは”風土病”扱いされておりそこから『病人』という通俗的な名称が生まれた。

なので『特殊指定人種』と戦闘経験がある者の方が少ない。ある人間はラギ達のような専門の特殊部隊の人間くらいしかいない。

では『特殊指定人種』を配属させればいいのか？そういうわけにもいかなかった。

そもそも『特殊指定人種』として生まれたら、もしくは『特殊指定人種』と判明したらすぐに役所へ届けを出して登録しなければならい。これは簡単に言えば”将来的に重大な犯罪を起こしえる能力を持った人間を監視する”ということほかならなかった。本人たちからしたらたまったものではないが、他国民からは特に異論もなく例えば、何も無い空間から家を簡単に燃やせるほどの業火をだせる人間は恐怖の対象なのだろう、登録すれば国からいくらかの”特殊指定者手当”が支給されるのでおおむね問題もなく運行している制度である。ちなみにこれを登録しないものは罰せられてしまう。たいていは罰金 一般市民の年収程度はとられてしまうが 程度ですむが、最悪の場合は一家ごと刑務所へ長期いれられてしまう。その支給金が理由なのか、命の危険を冒す危険がはらむ職業である軍人になるものも少ない、というかほとんどいない。皆無というわけではないが。

そんなわけで果てしなく人材不足が続くのだった。

「何にせよ補充人材のリストアップは再三上申はしてみるよ」

諦め半分ではあるが、とは付け加えないでおく。ラギとしてはそのまま解体して違う部隊と合併した方がいい気がする。何も対『特殊指定人種』及びテロリスト部隊はここだけではない。

自分から言っておいて少しだけ不愉快になり、また煙草をに火をつける。

「無理にはしなくてもいいと思いますがね。合併でもすればすむことですよ」

どうやらテイルも同じ意見ではあったようだ。

正直そうなのはあるが、

「まあ一応金かった部隊ではあるからそう簡単にはいかないよ。それに僕が隊長になってから一か月程度で解散なんてちよっと不名誉だろ？僕の偉大な経歴に傷が残っちゃう」

少し冗談めかして言うとティルはつまんなさそうに笑い、

「そうですね、エリート様ですもんね。今度の任期明けには第一騎士団の士団長になるんですけどっけ？もしくは総將軍にでもなるのかしらっ？」

面白がるようにならかってくる。だがあくまでもマジメな調子で

「君がなれっていうならなってみせるよ」

「ふふっ頼もしい限りね」

軽口を流しながら、ティルは微笑を浮かべ少しぬるくなったであろうコーヒーに口を飲もうとしている。ティルを見ているついでに時計を見る。一五時を少しまわったところだった。この時間にいったらすぐに会えるだろう。根拠はないが。

「さて、そろそろルースト閣下のとこへ行ってくるよ」

ラギは窓を閉めティルの横まで来ると頬にそつと手を伸ばし、

「ところで今夜空いてる？雰囲気の良い静かな店見つけたから飲みに行かない？」

お酒を誘う。ティルはその手を握り返すようにそつと上から重ねる。

「いいですよ、今日もうちに來ます?」

「いや、今日はまつすぐ帰るよ。こないだの事件の報告書も書かなければいけないし」

「そう…ならしょうがないですね」

少し残念そうな声をだすティルの頬から髪へ手を動かし危険物を扱うかのように優しくなでる。

「悪いね。そうそう、後で戻ってくるだろうから資料とか集めておいてよ」

「了解です」

彼女は薄く笑う。二人だけの時間を演出してみてもいつも仕事の話が混じってしまうからだろう。プライベートと完全に切り分けようと努力してはいるのだが。

そんなことを考えながらラギは手を離し、放置したまま冷めてしまっている自分のコーヒーを一気に飲みほす。少しまぶさくなってしまうが猫舌なのでちょうどいい。

「じゃあ行ってくるよ」

「ちよっと待って」

ティルが引き止める。可愛い奴め。

「その恰好で行くつもりですか?さすがに着替えてください。栄光ある部隊の隊長なんですからもっとキチツとしてください。他の部隊の人間に笑われます」

可愛くない奴め。ラギはロッカー室へ行き、自分のロッカーを開けて中にいれてある若草色の軍服に着替え、『王の銃』の隊長たる

証である銀細工できた紋章 王室のマークである”二匹の鷹が王冠と剣を持つレリーフ”の剣のかわりに銃を彫つてある を胸の階級章の上につけ、ロッカーの内側に備え付けてある鏡で髪を整える。

ロッカー室から、ドアに向かいでてテイルに声をかける。

「じゃあ書類頼んだよ」

「はい。了解しました。緊急任務なようでしたら夜のこと早くキャンセルにするって言ってくださいね？」

ドアを開けながら声をださず後ろ手で手をふりながら返事をする。

どんな時でも正直な彼女がラギは好きだった。

テイルもたぶんだがラギのことが好きなんだと思っている。

ラギは部屋をでると頭の中で目的地であるルーストの部屋を思い浮かべる。別棟にあるので一回いま自分のいる建物をでなければならなかった。

いまいる建物。それはラギが配属されている『王の銃』の大元である帝国第一騎士団の本営。王都であるイズナロスを中心に警護や治安維持、並びに立憲君主制であるメイナ帝国の王とその一族を守護する役割のため王都を本拠地に行っている。だが国境警備やメイナ帝国の主要な都市の治安維持をまかされている帝国第二騎士団の本営も王都にあるためただ「便利だから」という見方もある。

ちなみに騎士団は第三までであり、第三騎士団は海軍。なので第三騎士団の本営は王都から離れた海岸沿いの城塞都市シュテンブルムにある。閑話休題。

第一騎士団本営は『王の銃』や各一般部隊の詰所、装備などを保管しておく第一棟と、主に士官や司令官などの部屋と作戦会議室などを行う第二棟に別れており、ルーストのいる部屋は後者にある。

やたら靴音が響く薄暗い廊下を歩きながらラギは少しため息をつく。

めんどつくさいからだ。

サディストの殺人鬼を逮捕してから警察へ行き手続きやらなんやらを済ませたら昼になっており、そのまま王の銃の部屋へ行ったので睡眠をとっていない。いくら職業柄寝ないで行動することが当たり前になっていても疲れるものは疲れるし、眠くなるものは眠くなる。

そんなことを考えつつ薄暗い廊下を曲がり、階段を下り、また少し廊下を歩くと正面玄関にでる。玄関とはいうものの扉は解放しており、敷地内は一般開放されておらず、周囲は柵で囲っており正面門には常に門番が見張っているため 太陽の暖かい光が差し込んで

くる。

寝たい。

だがガマンして第二棟に向かう。

第二棟を歩きたびにラギは不満に思う。

第一棟とは違い、ほどよく明かりが差し込むよう設計された廊下。ところどころにバラの入った花瓶まで置いてある。靴音も響かない、それどころか薄いカーペットが敷いてある。

自分たちの部屋の目の前を思い出してみる。やめる。いつだって現実は辛い。

だが第一棟の設備に金がかかっているのにもわけがある。

そもそもメイナ帝国は貴族が残っている国だ。だが徐々に時代の波か、合理的になったのか、領地という制度はなくなっただけで、各都市を運営する議会という制度にかわっていった。これには国民から選ばれた市民も入っており、一昔前ほどの権力はなくなっていた。

だがやはり権力を持つ者は貴族が多く、軍上層部の半数は貴族が多い。なので見得か、それとも意地か、はたまた安いプライドなのか、自分たちの使う設備や施設などを改装するための寄付金をつのり常にほどよい高級感を演出している。さらには専属の秘書官を雇っというてる。

さすがに無駄遣いとの見見もでたりするが、施設の維持費などは貴族たちが払っているので表面上問題にはなっていない。

だがそれを踏まえたうえで個人専用の応接室まであるのは一兵士としてのラギも釈然とはしない。

そんなことを考えていたらルーストの部屋につく。正確にはルーストの秘書官がいる控室ではあるが。

ラギは襟元を直し、ドアを軽くノックする。

「どつぞ」

中から涼やかな女性の声がある。聞こえたのを確認するとドアをあけずぐさま敬礼し、

「失礼いたします。ルースト閣下からお話があるとうかがったのでラギ・イーリス十翼長出頭いたしました！」

声を張り上げる。形式ばった挨拶は苦手ではあったが、これも義務なのでしようがない。

シンプルな木机に座っている女性はそんなラギの姿を見ると苦笑するかのように口を緩め、

「ご苦労様。閣下はいまちよつと手が離せないので応接室で待つててください。それと、何？改まって。あなたってそんなに礼儀正しい人でしたっけ？」

クスクスと笑いながらラギに言う。普段の自分に態度を思い出し肩をすくめる。

「いやーテイルにキチツとしろって言われちゃったからさ。たまにはね。っていうかラクマリは普段僕のことどんなふうに思ってるんだよ。これでもキチンとダメ軍人やってますよ？」

女性　ラクマリは少し肩をすくめ、

「ラギはそのくらいがちょうどいいわよ。だからこそ閣下もあなたを、そう、ダメ軍人を使うんでしょ？」

ダメ軍人という言葉が面白かったのか、少し笑いながら答えてくる。

ラクマリはよく笑うせいか彼女がいるだけで場が和む。それに加和むだけの人ではなく、ラギのような特殊部隊の　さらに言うなら特殊指定人種という忌み嫌われる　人間にたいして物怖じしなくハッキリと物を言う女性。さらにブロンドにウェーブのかかったロングヘアーに少し切れ目の目。だがどことなく愛嬌をのこした顔のせいか、割と万人から人気があつた。

「酷いなー。まあいいや。応接室使わせてもらうね。」
「はい、少々お待ちになってくださいな」

ラギは手で合図をし、ラクリマがいる場所の右側にある扉を開け応接室に入り、目についたソファーに座り、慣れたこの部屋を見渡す。

応接室の中は広さはそんなでもないものの、調度品一つ一つ金がかかっていそう。ラギがいま座っているソファーも、ラギ達が使っているものより値段の差が相当ありそうだった。目の置かれているテーブルもアンティーク調のガラステーブルでこれまた高そう。さらにそのテーブルの上に置いてある灰皿も、ラギの記憶が確かなら、ラギの給料一か月分ほどの値段がしたはず。悲しみか、はたまた怒りからか、思わず能力である”光”で消したくなってしまふ。怒られるどころですまないのではないが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0944w/>

神のいない墓地で僕は

2011年9月29日03時28分発行